

≪ I この書物が画期をなす理由 ≫

【1】生駒の神話（生駒を舞台にした日本神話）の謎 ～～

▼生駒の神話（長髓彦伝説）の概要⇒（クリックしてください）<http://www.youtube.com/watch?v=IWQru5gF1JI>

（1）磐余彦尊いわれひこのみこと（神武天皇）の軍隊（以後、神武軍という）を打ち破った**長髓彦ながすねひことは何者か？**明治になって逆賊であると再認定されて以来、学問的（実証的）に研究されることなく、長髓彦が何たるかは謎のままで今日に至ってきた。

<仮説：邪馬台国は先住系と渡来系の共存国家であり、長髓彦はその指導者の一人ではなかったか。>

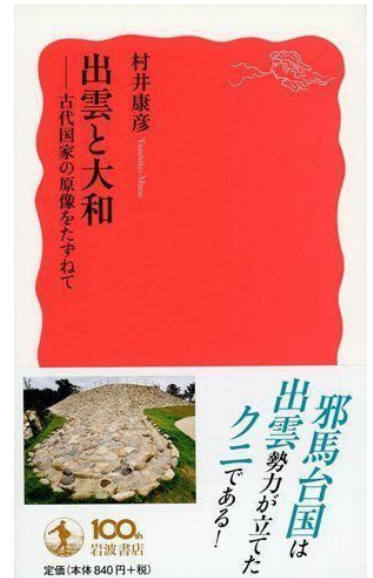
（2）**長髓彦の最後も不明なまま**（文献によってその記され方がまちまち）。古事記にはそれについての記載は一切ない。日本書紀では義弟（妹の夫）である饒速日命にぎはやひのみことによって、先代旧事本紀せんたいくじほんき（旧事紀くじき）では甥（妹の子）である可美真手命うましまでのみことによって殺害されたことになっている（そんなことはにわかには信じがたい。逆賊とされたがゆえにそのように記されたのであろう）。東日流外三郡誌つがるそとさんぐんしでは神武軍との戦い後、日高見ひたかみ（東北地方）の地を新たな故国として移住し、東北先住民族と合流して「アラバキ族」と名乗り、日高見の国を長く治めたと記述されている。

<仮説：長髓彦は大和での働き（先住系と渡来系の平和共存実現）を終えて、渡来系の勢力がいずれ及ぶであろう東北に働きの場所を移したのではないか。>

（3）長髓彦軍と神武軍との最後の決戦のとき、「**金色の鴉とび**」は**長髓彦軍の守護神であった※にもかかわらず飛来して長髓彦の軍兵たちの気力を失わせてしまったのはなぜか**。この謎を解くヒントは、守護神たる「金色の鴉」は緒戦時ではなく最後の決戦時に飛来したことである。

<仮説：「負けて勝つ」または「戦わずして勝つ」ことを教えるためではなかったか。>

※「**金色の鴉は、本来は長髓彦（また登美彦）の側のトーテム（神）**ではなかったか。登美彦の登美（トミ・トビ）と、鴉（トビ）と通ずるようである。そしてこれは生駒の「山ノ神」であり、霊蛇神であったものであろう。さきの『宇佐宮託宣集』に八幡神の発現の記事としてみられた「霊蛇、化鳥」の図式すなわち『金色の蛇（トビ）→金色の鳥（トビ）』が、まさにその原型をとどめる形でここに神武東征に明示されたものではないかと思われる。」（『生駒市誌』より<赤字は引用者による>）



（4）「金色の鴉」の働きで神武軍勝利で戦いが終結してもよいのに、その後、**長髓彦軍と神武軍の間で和平交渉**が行われた

のはなぜか。

<仮説：長髓彦（または長髓彦と磐余彦尊の両者）は、「**金色の鷄**」の教えを実践したのではないかと。>

(5) 決定的な勝敗がつかず、和平交渉の結果や長髓彦の最後も不明なまま、**饒速日命が磐余彦尊への「国譲り」**をしたのはなぜか。また、饒速日命の「国譲り」と、**大己貴命おこなむちのみこと（大国主命おおくにぬしのみこと）の「国譲り」**とは何か関係があるのか。

<仮説：「国譲り」とは、実は「負けて勝つ」または「戦わずして勝つ」ことではなかったか。大己貴命は「国作り」を成し遂げて「大きな国の主」の意である大国主命となったが、その後、戦いを回避して、せっかく作った国を譲ってしまった（「国譲り」）。しかし、それによって、最高神ともいうべき大物主神おおもものぬしのかみ（「万物の主（森羅万象を司る神）」の意）となった。これは、「譲って=負けて・戦わずして」勝つことを示すものではないか。これと同じことが、饒速日命の「国譲り」においてもあったのではないか。饒速日命を祭る神社が多いことでそれを証明できるのではないかと。>

## 【2】この書物は【1】の謎・疑問を解いているか

① (1) については、長髓彦は「**生駒地域の首長ただだけでなく、饒速日命の率いる邪馬台国連合の総大将であった**」とほぼ断定している。これは、**長髓彦とは何者であったかを初めて学問的（実証的）に解明した**ものである。この書物が画期をなす所以である。

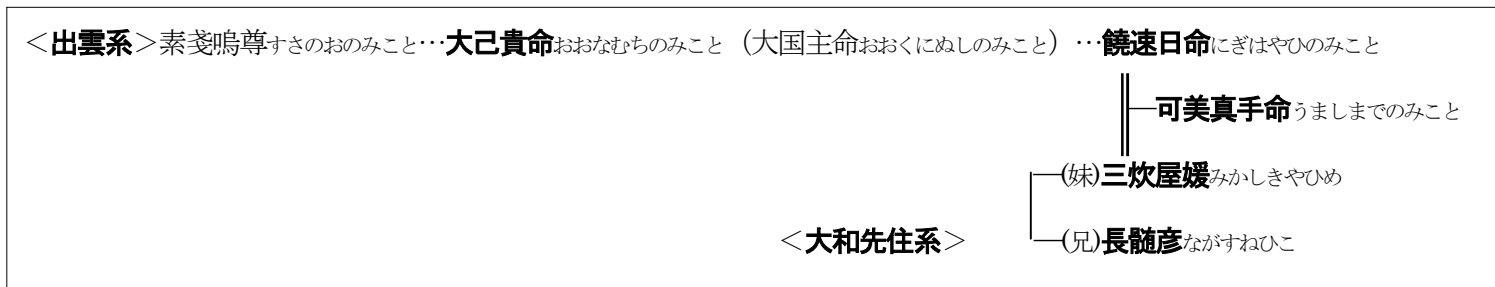
② (5) の謎・疑問については、「**饒速日命の帰順（国譲り）は大国主神の国譲りと相似し、その原像であった**といえるであろう」として、答を示唆している。これも画期的な論考であるが、残念ながらまだ十分な答とは言い難い。

③ その他の謎・疑問については、答は用意されていない。かかる謎・疑問を解明することを目的とする書物ではないから当然のことである。しかし、この書物は、生駒の神話の根本の謎（長髓彦とは何者か？）を解いたことで、その他の謎・疑問<とりわけ(3)>を解明する道を大きく切り開いた。これにより、生駒の神話が我々に与えている「**謎=知恵**」の解明が進んでいくことが期待できる。

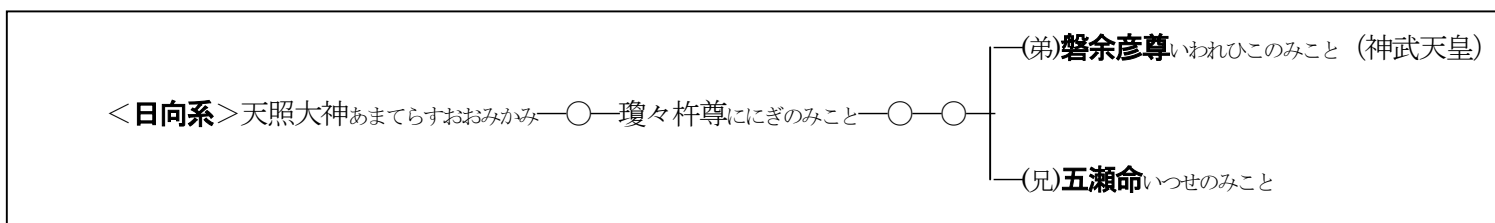
## 【3】長髓彦が邪馬台国の時代に活躍したことが確定されると、「謎・疑問を解く鍵」はこれになるでしょう。

(クリックしてください→) <http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/19.pdf>

生駒の神話（生駒を舞台にした日本神話）の主な登場人物の表



VS（神武軍の大和侵攻）



【表の注釈】

(1) 3つの勢力等

- ①出雲系：出雲方面から大和など各地に進出した渡来勢力
- ②日向系：九州方面から大和に進出し、そこより更に各地に進出した渡来勢力
- ③大和先住系：出雲系、次いで日向系が大和に進出するはるか以前から大和に居住していた日本列島先住者

(2) 系統・別名等

- ①出雲系の系図は日向系と比べてあいまいなので「…」で記しています。
- ②大己貴命：根の国（ねのくに／異界）から帰還し、国作り（出雲にはじまり北陸・大和などに至って完了）を成就したことで「大きな国の主」の意である大国主命（別名：大国主神おおくにぬしのかみ・大国主大神おおくにぬしのおおかみ）となる。国譲り後は、大己貴命の幸魂さきみたま（幸せをもたらす働き）・奇魂くしみたま（不思議な力をもたらす働き）が三輪山に奉祭されたことで**大物主神**おおものぬしのかみ（「万物の主（森羅万象を司る神）」の意。大国主神が自然神に変身した姿）となった。
- ③磐余彦尊：長髓彦との戦いののち即位して神武天皇と呼ばれるようになる。
- ④五瀬命：長髓彦との戦いで受けた傷がもとで死去する。
- ⑤生駒の神話に限らず、日本神話の登場者は下記のように「亦またの名」（別名・異称）が多いですが、この表ではできるだけ『出雲と大和』で記されている名を用いました。

亦の名

（太字：『出雲と大和』に登場するもの）

- 素戔鳴尊：素戔男尊すさのおのみこと・建速須佐之男命たけはやすさのおのみこと・須佐乃衰尊すさのおのみこと・素戔鳥尊すさのおのみこと・建速素戔鳥尊たけはやすさのおのみこと・素戔鳴神すさのおのかみ・神須佐能衰命かむすさのおのみこと・須佐能乎命すさのおのみこと
- 大己貴命：(大国主命・大国主神・大国主大神、大物主神のほか)大己貴神おおなむちのかみ・大穴牟遲神おおなむちのかみ・大穴持命おおあなもちのみこと・大汝命おほなむちのみこと・大名持神おほなもちのかみ・国作大己貴命くにつくりおほなむちのみこと・八千矛神やち

ほこのかみ・大國魂大神おおくにたまのおおかみ・顕国玉神うつしくにたまのかみ・宇都志国玉神うつしくにたまのかみ・伊和大神いわおおかみ・所造天下大神あめのしたつらししおおかみ・幽冥主宰大神かくりごとしろしめすおおかみ・杵築大神きづきのおおかみ、根の国での名前は、葦原醜男あしはらしこを・葦原色許男神あしはらしこをのかみ

○饒速日命：**櫛玉饒速日命**くしたまにぎはやひのみこと・**邇藝速日**にぎはやひのみこと・天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊あまてるくにてるひこあまのほあかりくしたまにぎはやひのみこと・**天火明命**あめのほあかりのみこと・天照国照彦天火明尊あまてるくにてるひこあめのほあかりのみこと・**胆杵磯丹杵穗命**いきいそにきほのみこと・**彦火明命**ひこほあかりのみこと

○可美真手命：宇麻志麻遲命うましまちのみこと・宇摩志麻治命うましまちのみこと・味間見命うましまのみこと

○三炊屋媛：登美夜毘売とみやひめ・御炊屋姫みかしきやひめ・登美弥比女とみやひめ・**登美姫**とみひめ・**鳥見屋媛**とみやひめ・**登美夜毘免**とみやひめ

○長髓彦：登美能那賀須泥毘古とみのながすねひこ・那賀須泥毘古ながすねひこ・**登美毘古**とみひこ・**登美彦**とみひこ

○瓊々杵尊（これは、瓊瓊杵尊ににぎのみこと・邇邇芸命ににぎのみことと共に略称）：天饒石国饒石天津彦火瓊瓊杵尊あめにぎしくににぎしまつひこほのににぎのみこと・天津日高彦瓊瓊杵尊あまつひたかひこににぎのみこと・彦火瓊瓊杵ひこほのににぎのみこと・火瓊瓊杵ほのににぎのみこと・天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命あめにぎしくににぎしまつひこほのににぎのみこと・天邇岐志あめにぎし・国邇岐志くににぎし・天日高日子あまつひこひこ／あまつひたかひこ・**天津彦彦火瓊々杵尊**あまつひこひこほのににぎのみこと

○磐余彦尊：彦火火出見ほほでみ・神日本磐余彦尊かむやまといはれひこのみこと・神日本磐余彦火火出見尊かむやまといはれひこほほでみのみこと・神日本磐余彦天皇かむやまといはれひこのすめらみこと・始馭天下之天皇はつくにしらすすめらみこと・神日本磐余彦火火出見天皇かむやまといはれひこほほでみのすめらみこと・神倭伊波礼毘古命かむやまといはれひこのみこと・伊波礼毘古命いはれひこのみこと・彦火火出見尊ほほでみのみこと

### 《 Ⅲ 「生駒の神話」に密接な関係のある部分の抜粋引用 》

下記のURLをクリックすればお読みいただけます。

<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/16.pdf>